

仏典から見た『源氏物語』の表現

―「心から」「心づから」の語と玉鬘系後記説の関係に注意して―

石井 公成

はじめに

「挨拶する」「機嫌が良い」「有頂天になる」など、日常で使われている表現には仏教の言葉が多いことは良く知られている。しかし、和語のように思われている言葉も、実は仏教由来である場合が少なくない。たとえば、漢訳経論の用語である「念知」を和語化した「おもいしる（思い知る）」などがそうだ。『古今和歌集』には、この語を含む僧正遍昭（八一六―八九〇）の次の歌が採録されている。

散りぬればのちはあくたになる花を思ひしらずも迷ふ蝶かな（四三五）

散ってしまえばゴミになる花であるのに、そのことを「思ひしらず」に花の色香に迷っている蝶であることだよ、という歌だ。むろん、無常な存在であることを知らず、美しい女性に恋い焦がれて執着するばかりであって、このま

までは来世は悪処に生まれるであろう男性の愚かさを、花に迷う蝶にたとえたものだ。ただ、教訓を述べたものではなく、遊びの歌であることは、花の名である「くたに」を読み込んでおり、物名の部に収録されていることが示す通りだ。

「念知」の語は『華嚴經』『大般若經』その他の漢訳経論で数多く用いられており、地獄の描写で知られる瞿曇般若流支訳『正法念処經』では、快樂に満ちた天に生まれた男について、次のように述べている。

而自思惟、我以何業而来生此。即自念知、我於前世作斯善業、供養衆僧。如是善業猶如父母。（大正一七・一八七下）

而も自ら思惟す、「我、何の業を以て来りて此に生まるるや」と。即ち自ら念知すらく、「我、前世に於て斯の善業を作り、衆僧に供養す。是の如き善業は、猶お父母の如し」と。

すなわち、我が身を振り返ってみると、僧侶たちに供養するなどの前世の良い行為が元となり、父母が子を生むように、そうした善業がこの素晴らしい結果を生み出したのだと、よくよく考えて理解した、というのだ。

代表的な仏伝の一つである『仏本行集経』でも、

菩薩如是思惟念知、以無無明故諸行無、以滅無明故諸行滅。（大正三・七九五中）

菩薩、是の如く思惟し念知す、「無明無きを以ての故に諸行無く、無明を滅するを以ての故に諸行滅す」と。とあり、よくよく考えて知り、「なるほど」と実感するといった場面で用いられている。

遍昭は天台宗の学僧だっただけに、「念知」の語のニュアンスをわきまえたうえで「思ひ知る」という和語にし、遊戯的に用いたのだろう。その遍昭にも負けないほど、仏教由来の語を見事に使いこなして主要人物を巧みに描き分けたのが『源氏物語』であり、その言葉とは、これまで自業自得の「自」を和語化したものであることが知られてい

ない「心から」「心づから」だ。本稿では、この二語について検討してゆくが、その際は、仏教由来の語であることがあまり意識されていない他の語についても指摘したい。また、「心から」「心づから」の語が用いられている巻にはかたよがりがあり、紫上系と玉鬘系の区別と関係しているように思われるため、この点についても注意する。

一 自業自得と「心から」「心づから」

『万葉集』中でこの語を用いたのは、集中で最も面白い歌と呼ばれている巻十三の作者不明のこの歌だ。

さし焼かむ 小屋の醜屋に かき棄てむ 破薦敷きて 打ち折らむ 醜の醜手を さし交へて 寝らむ君ゆゑ

あかねさす 昼はしみらに ぬば玉の 夜はすがらに この床の ひしと鳴るまで 嘆きつるかも (三二七〇)

反し歌

我が心焼くも吾なり愛しきやし君に恋ふるも我が心から (三二七一)

女が、自分の恋人の男が他の女と寝ている様子を想像し、悪態をつくものの、昼夜、嫉妬にかられて苦しんだという内容であり、反歌では、嫉妬で苦しむのも、そんな男が好きになってしまったのも自分からであって誰のせいでもない、と自分に言い聞かせている。表現が大げさすぎるため、女性による本当の嫉妬の歌ではなく、男性が作り、酒宴の席などでわざとらしい身振り手振りつきで歌って皆の喝采をあびる、といった情景が浮かんでくる歌だ。

注目すべきことは、以前指摘したように、この反歌には仏教由来の表現が多いという点だろう。まず、「心を焼く(焼心)」というのは、良くある言い回しのようなだが、中国の古典には見えず、漢訳経論でしばしば用いられた表現だ。地獄の詳しい描写で知られる『正法念処経』では特に数多く用いられている。その代表的な箇所をあげると、以

下の通りだ。

看彼婦女、欲愛燒心（彼の婦女を見るに、欲愛、心を焼く）（大正一七・三三上）

諸天女等、天鬘莊嚴。天子見之、欲火燒心（諸天女等、天鬘もて莊嚴す。天子、之を見て、欲の火、心を焼く）

（同・一六一下）

若心貪女色 是欲最尤甚 女色欲燒心 後受大苦惱（もし心、女色を貪れば 是の欲、最尤も甚し 女色の欲、

心を焼けば 後に大苦惱を受く）（同・一六九下）

死時既到已 悔火自燒心（死時、既に到り已れば 悔火、自ら心を焼く）（同・二五七上）

次に「我が心から」は「心から」と同義であって、これも仏教由来の表現だ。「心から」という語は、現在では「心からお詫びする」といった文脈で用いられるが、これは from the bottom of my heart などに基づく近代の用法ではなからうか。「心から」の語は、西鶴『好色五人女』の「欲の心から残らず語りて」や近松門左衛門『仮名手本忠臣蔵』の「年寄の愚智な心から恨云たは皆誤り」のように、「そうした心に基づいて」の意の用例が江戸時代あたりから見られるようになるものの、現代の用法につながるものではない。近世以前で見られるのは、「自業自得」を示す用法ばかりだ。

たとえば、先の歌が載る『万葉集』では、

水江の浦島子を詠む一首反歌 高橋虫麻呂

常世辺に住むべきものを剣刀己が心からおそやこの君（卷九・一七四一）

とあり、「不老不死の世界に住むことができたのに、自分からそこを離れるなんて、この人は愚かだなあ」という文脈であるため、「己が心から」は、自分の愚かな行為が原因でつらい目にあうこと、つまり、先の嫉妬の歌の反歌と

同様、自業自得であることを意味している。

その「自業自得」という句が見えるのが、まさに先に見た『正法念処経』だ。同経は、地獄で苦しんでいる亡者たちについて、次のように説いている。

自業自得果、衆生皆如是。汝自心所作、一切如是誑。今為大火燒、何故爾呻喚。……閻魔羅人、如是責疏地獄人言、汝自作業、今者自受。不可得脫。(大正一七・三六中下)

自業もて自ら果を得、衆生は皆な是の如し。汝の自心の所作は、一切、是の如く誑なり。今、大火の為に焼かるるに、何が故に爾、呻喚するや。……閻魔羅人、是の如く地獄人を責疏して言く、「汝、自ら業を作り、今、自ら受くるのみ。脱するを得るべからず」と。

この自業自得の「自」を和語化したのが「心から」であって、和歌で用いられるように七言にしたものが「我が心から」「汝が心から」だったと思われる。³⁾

この語は、『古今集』には三例見えている。一つは、物名の部の冒頭に置かれた藤原敏行の歌だ。

心から花のしづくにそほちつ憂く干ずとのみ鳥の鳴く覧(四二二)

自分から進んで濡れた花の枝に止まっておりながら、つらいことに乾かないとばかり鳥が鳴いていることだよ、というものであって、「憂く干ず」に「うくひす(鶯)」を掛けたもので、自業自得であることを詠んでいる。⁴⁾

次の例は、凡河内躬恒(八五九?—九二五)の歌だ。

夏虫を何かいひ剣心から我もおもひにもえぬべら也(六〇〇)

すなわち、自ら火に近づいて焼けてしまう蛾を愚かなように言ったものの、自分自身も自ら恋にはまりこみ、焦がれ死んでしまうだろうというのだ。自ら火に飛び込んで焼ける蛾は、自業自得の例として仏典がしばしば説くところ

であつて、お馴染みの『正法念処経』も蛾の譬喩を何度も説いている。その代表は、以下の偈だ。

若人著欲楽 常為欲所燒 如蛾投灯火 欲火過於此（大正二七・一七二中）

もし人、欲楽に著せば、常に欲の焼く所と為る。蛾の灯火に投ずるが如きも、欲の火は此に過ぐ。

ここには「自ら」やその類語は見えないが、自業自得の例として引かれる最も有名な出典である『仏名経』では、

如蠶作繭自縲自縛、如蛾赴火自燒自爛。（大正一四・一九八上）

蠶の繭を作りて自ら縲し自ら縛せらるる如く、蛾の火に赴きて自ら焼け自ら爛るるが如し。

と述べていて「自ら」という点が強調されており、「自縲自縛」という表現の元となっている。

『古今集』のもう一例も躬恒の歌であつて、

君をのみ思ひねに寝し夢なればわが心から見つるなりけり（六〇八）

とある。あなたが私のことを思つていて夢に現れてくれたのではなく、あなたのことばかり思つて寝た際に見た夢なので、私の心があなたを描きだしたにすぎなかつたのだ、と歎くものだ。これは、すべての現象は自分の心が描き出したものだとする唯識思想に基づいており、仏教に基づく表現である点は同じだが、これまで見て来た「心から」とは意味が異なる。ただ、自分のせいという点は保たれている。

『古今集』では、「心づから」も一例、藤原好風の歌に見える。

春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみん（八五）

花が自分から散ってしまったのだから仕方ないと思うことができるよう、春風よ花のあたりはよけて吹いてほしいと願つた歌だ。自業自得だと批判するものではないが、「しなれば良いのに、自分でわざわざする」という原義は保たれている。

このように、『万葉集』と『古今集』には少ない数ながら見えているものの、『竹取物語』『伊勢物語』には見えず、『宇津保物語』でも俊蔭について、「いと心強う心深かりし人にて、公を恨み、世中をしらでなむ身をも心づから沈めてし」と述べ、自ら零落したとしている箇所があるのみだ。

『源氏物語』の同時代では、『和泉式部日記』に一例見えている。帥宮が夜中に訪れたのに、すぐに応対しなかったため、別の男が来ているものと思つて宮が帰ってしまったため、後悔の念に駆られた和泉式部が、後日、

まどろまであはれいく夜になりぬらんただ雁が音を聞くわざにして

と詠んで送り、以後、寝られず、雁の鳴く音を聞くことだけを毎日の「わざ」としておりますと告げたところ、帥宮が届けてきた歌の一つにこうあった。

まどろまで雲居の雁の音を聞くは心づからのわざにぞありける

つまり、あなたが寝ないで空を飛ぶ雁の音を聞くことだけをなす「わざ」としているのは、あなた自身が我が身にもたらしたものであったことだよ、と述べるのだ。「わざ」は漢字で表記すれば「業」であり、これはおこない・仕事を意味するとともに、行為そのものとそれがもたらす余波をとともに意味する仏教の karma の漢訳語でもある。帥宮の歌の「わざ」でもカルマの意がほのめかされており、眠れないのは「心づから」もたらされたものであつて自業自得であるとして批判する形になっている。

『紫式部日記』では、藤原道長（九六六—一〇二八）が様々な色に咲き乱れている庭の花々の中から見事な女郎花をひと枝折り取つて式部に示し、歌を詠むよう求めたため、花々を美しく染める露の恵みに漏れたくすんだ花のような我が身を歎く歌を詠んだところ、道長は、

白露はわきてもおかし女郎花心からにや色の染むらむ

と返したとある。道長が「白露は分け隔てはしないだろう。女郎花が綺麗に色づいているのは、自分から進んでのことではないだろうか」と述べたのは、これまで指摘されていないが、大地を潤す雨は平等であるのに、受ける草木の性質の違いによって大小様々に育つという譬喩によって、仏の説法は平等であるのに聞く側の能力によって受け取り方が様々であることを説いた『法華経』葉草喩品の以下の偈に基づいている。

其雨普等 四方俱下 流澍無量 率土充洽 ……其雲所出 一味之水 草木叢林 随分受潤 一切諸樹 上中下等 称其大小 各得生長 根茎枝葉 華菓光色 一雨所及 皆得鮮沢 (大正九・一九下)

其の雨、普く等しく四方に俱に下り、流澍すること無量にして、率土、充洽す。…其の雲の出だす所の一味の水、草木叢林、分に随いて潤を受け、一切の諸樹、上中下等、其の大小に称いて、各の生長するを得。根茎枝葉、華菓光色、一雨の及ぶ所、皆な鮮沢なるを得る。

このように、平等な雨によって花の色があざやかになることも説かれている。梵文では乾期の後に猛烈に降る恵みの雨としているのに対し、日本では、九世紀前半の『東大寺諷誦文稿』が「春ノ細雨降ル時ニ、万木生長スルガ如ク、平等一味ノ法ノ細雨ヲ下シ」と述べ、藤原俊成(一一一四—一二〇四)『長秋詠藻』は「春雨は此面彼面の草木も分かず緑に染むるなりけり」(四〇七)、寂蓮(一一三九頃—一二〇二)の法華二十八品歌のうち「草木叢林随分受潤」と題して葉草喩品を詠んだ歌では「春雨は野辺の草木も分かねども染むる心の変はる也けり」(九四)と説かれていることが示すように、この譬喩を日本のしつとりした春の雨の情景と受け止めるのが通例になっていた。⁶道長は法華三十講を毎年行わせたほか、学僧から天台三大部の講義を聞くなどしており、『法華経』信仰が篤かったことが知られている。

『紫式部集』では、この道長の歌が収録されているほか、海人が塩を焼く様子を描いた絵を描いて、自分もこの火

のように思い焦がれていると訴えてきたことに對する返歌として、

よものうみに しほやくあまの こころから やくとはかゝる なげきをやつむ

と詠んだとしている。四方の海辺で塩を焼く海人が「投げ木」を積んで焼くように、あなたは自分から求めて「嘆き」を重ねているだけですね、と応対した歌だ。若い頃の歌なのか、「こころから」の語は定型表現を用いただけのことになっている。

二、『源氏物語』第一部の用例

これまで見てきたように、自業自得の意である「心から」や「心づから」の語は、奈良・平安時代の文学作品に僅かに見えていたが、『源氏物語』では「心から」が十七例^①、「心づから」も八例用いられている。しかも、『源氏物語』ではこの「心から」「心づから」の語によって主要な登場人物の性格を描きわけているのだ。

『源氏物語』の早い巻には「心から」の語は見えない。現行の五十四帖における初出は、末摘花巻において、源氏が末摘花と交渉を持つてその容貌と振舞いに辟易した後、対照的な若紫を見ていじらしく思う場面だ。

何心もなくてもものしたまふ給ふさま、いみじうらうたし。……心から、など、かう憂き世を見あつかふらむ、かく、心ぐるしきものをも見てゐたらで、とおほしつゝ、例の、もろともにひいな遊びし給ふ。(①三三三―四)^②

源氏は、若紫のこのうえなく可愛らしい様子を見て、自分はどうして自分からわざわざ求めて厄介な女性関係に踏み込んで悩む羽目になっているのか、これほどいじらしい存在を大事にしないでいて、と我が身を省みている。注目されるのは、「心から」悩む状態を作り出している源氏をほっとさせるのは、「何心もなく」振る舞っている童女で

あつて、その様子を見ると「心ぐるし」と書かれていることだ。つまり、心が悩みで一杯な源氏の気晴らしをしてくれるのは、無心に振る舞っていて、見ていると「心」がぎゅつと締め付けられるほどいらしい童女なのであり、徹底して「心」が追求されているのだ。しかも、この若紫は、物語が進んでつらい経験を重ねていくうちに次第に成熟してゆき、源氏以上に内省を深めていくに至っている。「心」の追求こそ、まさに『源氏物語』の特色にほかならない⁽⁹⁾。ただ、ここで自分から厄介な女性関係に踏み込んだと反省されているのは、近づくべきでない立場とはいえ、朧月夜がなびいてくれないことに悩み、醜女の末摘花と関係を持つてしまったことであつて、藤壺への重苦しい思慕は強くは意識されていないように見える。

なお、源氏は女性関係による悩みを「憂き世」と表現していたが、これも当然ながら仏教由来の表現だ。「憂世」は熟語としては仏典の漢訳には見当たらず、「憂世間（憂き世間）」「無憂世間（憂い無き世間）」などの用例が多い。「世間」は *loka* の訳であつて、『正法念処経』を含めて「無常世間」という表現が頻出することが示すように、仏典では原語の *loka* もその漢訳としての「世間」も無常のイメージと結び着いており、沙弥満誓の有名な「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟のあと無きがごとし」の歌が示すように、日本では特にその傾向が強い。日本では「世」「世の中」は男女の関係も意味するため両方の意が重ねられがちであり、『和泉式部日記』などは、最愛の帥宮との死別を悲しむ「夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ」という句で始まっている。

問題は、このように『源氏物語』全体のあり方を象徴するような「心から」の語が、早い巻には登場せず、なぜ滑稽な場面が多い「末摘花」に見えていて、その前の巻で用いられていないのか、ということだ。若紫巻では、藤壺は「あさましき御宿世のほど心うし」と思い、王命婦は「のがれがたかりける御宿世をぞ……あさましく思ふ」（一七七）と説かれており、「宿世」が強調されているが、源氏については「心から」おこした事柄について深刻に悩んだ

とは書かれていない。ここであらかじめ結論を述べておくと、『源氏物語』全体は、男は「心から」起こしてしまつた状況に悩み、女は「宿世」に流されて悩む、という構図になっていくように見える。そうであるのに、なぜ重要な若紫巻では「心から」の語が見えないのか。

末摘花巻以後で「心から」の語が登場するのは、賢木巻だ。しかも、あつてはならない源氏との関係が続けている朧月夜が、次のように詠っている。

心から方がた袖をぬらすかなあくど教ふる声につけても (①三五八)

つまり、「自分で求めてあれこれ涙にくれることです、夜が『明く』と告げる声を聞くと、あなたが私に『飽く』、と告げているように聞こえるようで」と述べるのだ。朧月夜は、尚侍となつた身でありながら源氏との関係を拒まず、自分から進んで関係を続けているため、そのいとしい源氏に飽きられてしまうことを思つて悲しまずにおれないのであつて、そのつらさを「心から」のもの、自業自得によるものと自覚していた。女が「心から」の振舞いを反省しているのは、明るくて積極的であつた朧月夜なればこそとも言えるが、「男〳心から、女〳宿世」という図式がまだ確立されていないため、こうした記述になつたとも考えられる。

以後の巻で「心から」の語が見えるのは、花散里巻の冒頭で語り手が源氏について語つた箇所だ。

人知れぬ御心づからの物思はしきは、いつとなきことなめれど、 (①三九五)

「御心づからの物思はしき」とは、自分から藤壺や朧月夜と関係を持つたことによつてあれこれ思い悩むことが多いということであつて、「心から」「心づから」の用法としては自然なものだ。

ところが、すぐ後の須磨巻では、空を行く雁を見て旅先での都恋しさを詠んだ源氏の歌に対し、お側に仕える良清・女房の民部大輔と前右近将監たちが詠つた歌のうち、民部大輔の歌はこうなっている。

こゝろから常世を捨て、なくかりを雲のよそにも思ひけるかな(②三三)

すなわち、そうした雁をこれまででは他人事だと思っていたと述べるのだ。「心から」の語を歌の冒頭に据えており、自分から愚かなことをしたと浦島子を批判した先の『万葉集』の歌を思わせる形になっている。その歌を直接踏まえているのかどうかは不明だが、飛ぶ雁のことを居心地の良い故郷を離れて旅ゆく存在とする見方が当時は常識となっていたことが推測される。ただ、都を離れて須磨にまで至り、旅先でわびしい状況になったのは、源氏の「心から」の振舞いによる。しかし、良清の歌も前右近将監の歌も、旅先での寂しさを詠んでいるだけであり、むしろ源氏の心に寄り添おうとしていて源氏を責めようとはしていない。したがって、民部大輔のこの歌では、「心から」の語があまり重くない形で使われていることになる。こうした旅をせざるをえないのも、源氏の「心から」の振舞いによるのだという批判をこめているようには見えない。いずれにせよ、源氏自身は「自分の心からの振舞いのせいで、ここまで流れついてしまった」と反省の歌を詠んでいないことが注目されよう。

源氏が、自ら反省して「心から」の語を用いるのは、次の明石巻からだ。紫上を気にしておりながら、懐妊していとしさがました明石上を置いて都に戻らねばならぬ状況にあつて、源氏が思い悩み、それを周囲の者たちが困った癖だとこぼす場面だ。

なぞや、心づから今も昔もすぞろなる事にて身をはふらかすらむ、とさまさまにおほし乱れたるを、心知れる人々は、「あなにく、例の御癖ぞ」と見たてまつりむつかるめり。(②八二)

「昔も」というところに藤壺や隼月夜が含まれているのだろうが、「今も昔も」とあつて、重点は現在の明石の上との困った状況に置かれており、藤壺や隼月夜との件を強く意識し、反省して「心から」と述べているようには見えない。この点は、少し後の薄雲巻の用例も同様であり、源氏は次のように述懐している。

過ぎにしかた、ことに思ひ悩むべき事もなくて侍りぬべかりし世中にも、猶、心から、すきしき事につけて、物思ひの絶えずも侍りけるかな。(②二四一)

ここでは、ことさらに思い悩まなくてすむはずだったのに、という文脈であるため、男女関係の面で思い悩むことが絶えないのは、自分が進んでそうした関係に踏み込むためだと自覚されており、「心から」の語の意味を良く示している。

ただ、あまり深刻に反省していない場合もあり、朝顔巻における、心を許そうとしない朝顔姫君とのやりとりもその一つだ。

さまよきほどにおし拭ひ給ひて、

つれなさを昔にこりぬ心こそ人のつらきにそへてつらけれ

心づからの」と、のたまひすさぶるを、「げに、かたはら痛し」と、人、例の、きこゆ。(②二六五)

源氏は、あなたのつれない態度に懲りない私の心こそが、あなたの恨めしさに加えて恨めしいことだと詠んだうえで、「心づからの」とつぶやいて『中務集』の「恋しさも心づからのわざなれば置きどころなくもてぞわずらふ」を匂わせ、このように自分がつらいのも、あなたへの恋心ゆえだと訴えている。

ただ、こうした男女関係における自業自得の用例以外の用法もある。少女巻において、秋好中宮が、六条院の春の町に住む紫の上に、

心から春待つ園はわが宿の紅葉を風につてにだに見よ(②三二五)

という歌を送っている。ここでの「心から」は、自業自得の文脈ではないため、「自分の心に基づいて」の意か、先に見た「心知れる人」の「心」と同様に意味・意図を指していて、「住んでおられる春の町の意味からして」と述べ

ているように思われる。新大系の注は「心から春の到来を待っている」(②三二六)とするが、新編全集の訳では「ご自分のお好み」(③八二)としており、こちらの方が適切に思われる。

続く野分巻もやや変則だ。夕霧とたがいに好意をいただきあっておりながら会えずにいる雲居雁が物思いにふけてばかりおり、すっかりやつれてしまっていることを、父の内大臣が批判した部分だ。

心づから物思はしげにて、くちおしうおとろへにてなむはべめる(③五二)

ここは朧月夜と同様、女が自分のせいで物思いにふけている例だが、雲居雁自身の言葉ではない。

次の真木柱巻は、源氏が玉鬘と会うことができなくなったことをひどく悲しみ、自分自身のことを一般論のように語った自業自得の例となっている。

すいたる人は、心からやすかるまじきわざなりけり。(③一四一)

色好みの人間は、自ら求めて、心安らかでおれるはずがなくなるようなことをするものだ、というのだ。源氏はその少し前では、

宿世などいふものをろかならぬことなれど、わがあまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかし(③一三九)

と語っていた。『源氏物語』では女性は「宿世」に左右される存在として描かれていることはよく知られているが、源氏は男女関係で自分が苦しむのは「宿世」による面があることを認めつつも、「わがあまりなる心」が主な原因であることを自覚しており、ここで「女⇨宿世、男⇨心から」という図式が確立されている。ただ、先の箇所では、「すいたる人は」と述べており、自分を含めてのこととはいえず、一般論のように述べているうえ、以後は源氏が自分について「心から」「心づから」と述べる場面はなくなる。

次の梅枝巻からは、源氏が代わって、雲居雁に恋して悩む夕霧が登場する。左の箇所は、内大臣に邪魔され、おそばの女房たちに軽んじられ、腹を立てて近づかなくなったものの、心がわりできない心境について述べたものだ。

ほかさまの心は、つかふべうもおぼえず、心づから、たはぶれにくき折多かれど、(③一六七)

「たはぶれにくき折」、つまり、「冗談じゃないぞ」と思うほど恋しい時が多くてつらいのだが、それは「心から」のもの、すなわち、他の女と結婚すればよいのに、自分からそうしない結果であって、自業自得というほかない。ただ、藤壺や玉鬘など近づいてはならない女性に近づいて苦しむ源氏とは違い、夕霧と雲居雁は同じような身分であってお似合いであり、互いに好き合っておりながら、夕霧が意地を張り、その結果、会えなくてつらくなるといって自業自得となっている。

第一部の最後である藤裏葉巻になると、夕霧の特徴がさらに強調される。結婚もせずにはいた夕霧が落ち着いたため、心配していた父の源氏もほっとしたことについて、語り手が語った部分だ。

心からなれど、世に浮きたるやうにて、見苦しかりつる宰相の君も(③一九二)

自分から女性に近づこうとしなかったためとはいえ、身が固まらずみつもなかった夕霧も、今では落ち着いてという文脈だ。ここでの「心から」は、女性に近づきすぎる源氏とは対照的なあり方であり、作者はそれを意識して人物を描きわけている。

ここまで見てきて気づくのは、重要な「心から」の語が出現するのは物語がかなり進んでからのことであって、若紫巻のような重要な巻でも用いられていないことだ。しかも、最初に登場する末摘花巻は、滑稽な面を強く打出した巻であり、武田宗俊の分類によれば、後に書かれた玉鬘系だ。¹⁰⁾ 第一部のうち、「心から」「心づから」の語が見えるのは十二例であって意味の違いはないようだが、玉鬘系は三例しかない。そのうち、第六帖の末摘花巻の次に玉鬘系で

「心から」「心づから」の語が見えるのは、第一部の最後に近い第二十八帖の野分巻と第三十一帖の真木柱巻だ。しかも、野分巻では源氏が反省するのではなく、女性の雲居雁が夕霧を恋しく思いつつ会うことができず、すっかりやつれてしまったのを父の内大臣が批判する形であり、真木柱巻では源氏が自らのことを意識してのこととはいえ、色好みの男性一般について語っている用例だ。そのうえ、初出の末摘花巻で源氏が「心から」の振舞いを反省するのは、女性関係の中でも主に末摘花と関係したことだった。すなわち、玉鬘系には、『源氏物語』前半の動因となる藤壺および朧月夜との関わりを源氏が強く反省して「心から」と述べたり、語り手がそのように語った巻は無いのだ。末摘花がこの位置にあるのはなんとも不自然と言わざるを得ない。

三、『源氏物語』第二部における用例

第一部では、女性である朧月夜や雲居雁についても「心から」の語が使われていたが、第二部の若菜巻上になると、女性が「心から」「心づから」と称される行為を進んですることほど疵となることはないことが強調される。朱雀帝が心幼い女三宮を訓誡した箇所だ。

親に知られず、さるべき人もゆるさぬに、心づからの忍びわざ、し出でたるなむ、女の身にはますことなき疵とおほゆるわざなる。(③二一八)

朱雀帝はこの訓誡に続けて、女三宮の夫候補たちについて論評した際、源氏については、ものごとを心得ているため安心だと語り、多くの女性たちがいるが気が掛ける必要はないと述べたうえで、「とてもかくても、人の心からなり」(③二一九)と説いている。これについて、新編全集は「万事夫となる人の人しだいというものだ」(③三四)と

訳しているが、新大系本の注のように、回りの人から嫉妬されたりするかどうかは、女性一般、とりわけ女三宮の「心から」だと述べたのものと見るべきだろう。激しく嫉妬したり、対抗しようとしたりすると、自業自得でつらい目に会う結果となると訓誡したものと思われる。女性一般について論じた形になっているが、むろん実際には、心が幼い女三宮なればこそその訓誡だ。

若菜巻下となると、柏木について「心から」の語が用いられるようになる。

おぼろけにしめたるわが心から、浅くも思ひなされず。(③三二二)

若菜の巻で強調されていた女三宮の幼さが發揮され、不用心にも姿を見せってしまったところを柏木が目撃してしまい、普通ではないとは思うものの、女三宮に対して並み並みでない思い込み方をしているだけに、あさはかであると考えられることもできないという流れだ。新大系は「しめたるわが心から」とあるが、旧大系本では「染めたるわが心から」に作っている。「染心（心を染める、染めた心）」は漢訳仏典に多く見えており、「心染」も「心染著」などの形も多く見られる。これらも中国古典に見えず、仏典漢訳で用いられた表現だ¹⁾。

続く柏木巻では、そうした恋心がさらにつのつて苦しさが増しており、

われよりほかにたれかはつらき、心づからもて損なひつるにこそあめれと思ふに、うらむべき人もなし、仏神をもかこたん方なきは、これみなさるべきにこそあらめ。(④四)

と自省し、神も仏も恨むことはできず、自分の破滅は「心づから」のものであると述べており、これまでにないほど「自業自得」という点が強調されている。柏木は源氏の過ちをくりかえす人物として描かれているが、源氏と違うのは、「心づから」によるとしつつも、「さるべきにこそあらめ」と言って前世の業によるのだらうとしている点だ。これは、柏木の弱さと考ええるべきだろう。新大系が「運命のなせるところであらうよ」(④五)と注しているのは不適

切だ。新編全集の「みな前世からの因縁というものであろう」(④二九〇)は正しいが、注で「運命の巨大な力によるとする」としているのは仏教を考慮していない不適切な表現であり、「前世の業によるに違いない(どんな悪業をしたのか……)」という点を強調する必要がある。こうした記述を見ると、契沖という偉大な先学の幅広い学問を受け継がず、仏教を排した江戸の国学と西欧の文学・語学研究との間に生まれた近代国文学研究が欠落させたものの大きさを痛感せずにはおれない。

源氏の過ちを繰り返すように、柏木が「心づから」の過ちを重ねていくのに対し、これまで源氏とは対照的であった夕霧も源氏に似てくる。夕霧巻では、雲居雁と結婚して幸せになった真面目な夕霧が、落葉宮に心を動かすようになったのだ。夕霧が夜遅くまで落葉宮のそばに居座って帰ろうとしないため、宮が、二人の間に何かあっただろうと世間の人が濡れ衣をかけることを懸念した歌を詠むと、夕霧は、濡れ衣はやはりまぬかれないであろうと述べ、

かうわりなうやはせ給ふ御心づからこそはと、きこえ給ふ。(④一〇一)

と説いて、それは私をすげなく去らせる宮の「御心づから」によると強弁している。これまでは、男女の間で思いをかけることが「心から」「心づから」の行為とされてきたが、夕霧は源氏のような行動的な色好みではないため、このようにねじけた形で、悪い結果になるのはあなたの「御心づから」によると脅すのだ。

夕霧はさらに、その少し後で、落葉宮に次のような手紙を送っている。

たましひをつれなき袖にとゞめおきて我が心から惑はるゝかな

外なるものとはとか、むかしもたぐひ有りけりとおもたまへなすにも、さらに行く方知らずのみなむ。(④一〇三)
魂をあなたのつれない袖に留めてきたのは私自身であるため、自業自得とはいえず、心ここにあらざる状態で悪い続けてしまうことだ、と訴えるのだ。「外なるものは」など昔の例もあったというのは、『古今集』に見える躬恒の「身

を捨ててゆきやしにけむ思ふよりほかなるものは心なりけり」(九七七)を踏まえる。先も見たように、躬恒は心に
関する和歌をいくつも詠んでおり、『源氏物語』はその影響を受けている。

このように、ねじけた形であるにせよ夕霧が「心から」の問題に悩み、それが世間の噂になると、父である源氏は、好色だった自分と違い、夕霧が真面目であったことを自分の不面目の挽回として嬉しく思っていただけに雲居雁と落葉宮の立場を思つて心を痛めたものの、「宿世といふ物のがれわびぬる事」と思つて口をはさまずにいた、と記されている。この「宿世」は、夕霧ではなく、雲居雁と落葉宮という女の宿世を指している。そのことは、源氏心痛を描いたすぐあとで、噂を聞いた紫の上が「女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし」(④一二三二)と悲嘆していることから知られる。

四、『源氏物語』第三部における用例

第三部といっても、「心から」の語は総角巻以後にしか登場しないため、実質は宇治十帖ということになる。その総角巻では、源氏とも柏木とも夕霧とも異なる形で薫の「心から」が描かれるに至っている。薫は、夕霧を引き継いだような面があるため、皇族でしかも若い身で出家している母の女三宮にもあまりなれなれしくできず、

そのほかの女は、すべていと疎く、つ、ましく、おそろしくおぼえて、心からよるべなく、心細きなり。(④三八〇―三八九)

という状況にある。女はすべてうとうとしく、また恐ろしく思われて近づけないため、自業自得とはいえず、伴侶を持たずにいるのだ。新編全集が、「心底から伴侶としたい人もなく」(⑤二二二)と訳しているのは誤りであり、新大系

の注が「自ら求めて伴侶とする人もなく」(④三八九)としているのは曖昧だ。

総角巻ではさらに、薫が中君を匂宮に手引きした後、匂宮の中君訪問が間遠になってしまったため、思っていたよりも浅い気持だったのかと不満に思うという場面で、「心から」の語が使われている。

いとほしく、心からおぼえつゝ、をさをさ参り給はず。(④四五〇)

すなわち、自分が手引きした結果とはいえ、中君が気の毒でならず、匂宮に対する不満がつのるので、匂宮のもとにはあまり参上されない、というのだ。新大系は「(中君には)お気の毒なことをしたと、心からお思ひになって」(四五〇)、新編全集は「心から中の宮をいじらしくお思ひになって」(⑤三一六)、最新の岩波文庫も「心からお思ひになって」⁽¹²⁾とするが、いずれも不適切であり、古典集成の「責任を感じる思ひで」(⑦九七)は、匂全体の趣意だ。ここの「心から」は、「いとほしく……おぼえ」たことの背景として、「自分のせいとはいえ」という形で間にはさまれてくる。これによって、これまでの注釈は、「心から」「心づから」について「自分から進んで」の意と説明している場合もあるものの、原義を把握しておらず、文脈によってその場その場で解釈しているため、曖昧な文の場合には理解できず、「本心から」などと説明しがちであることが理解される。

このあたりから、薫の後悔がつのるにつれ「心から」の語が繰り返し現れるようになり、大君についても反省がなされる。

わが心から、あぢきなきことを、思はせたまつりけんこと(④四六三頁)

これは、自分が愚かなことをしてかして、大君にひどく心配をかけたことを後悔したものだ。

早蕨巻の次の箇所は、『源氏物語』の特徴が良く出た部分だ。

いとうおぼえ給へるを、心からよそのものに見なしつると、いとくやくしく思ひる給へるを(⑤一一二)

中君が薫の愛していた大君にそっくりでいらっしやるのに、自分から進んで他人のものとする結果にしまったと悔しく思うというのが、源氏にあつては、母である桐壺更衣の代わりとなる存在が藤壺、その藤壺の代わりが若紫であり、その源氏の子ということになっていく薫の場合、大君の代わりが中君と浮舟となっている。つまり、『源氏物語』の重要人物である源氏と薫は、常に代わりの存在を求めているのであり、源氏は藤壺に「心から」近づいて自ら苦しみ、また相手を苦しませ、柏木は「心から」の行動によって自ら苦しむとともに女三宮を苦しませ、薫は大君と浮舟を苦しませている。このほか、源氏と朧月夜や明石上の関係について記した部分でも「心から」の語が用いられていたが、紫上については、まだ幼い若柴を源氏が強引に引きとり、妻とした後も多くの女性関係によって苦しめておりながら、源氏の「心の鬼」などが言われるものの、紫上関連では「心から」の語はまったく用いられないことが注目されよう。紫上は特別な存在なのだ。

さて、薫は宿木巻でも、

見し程よりも、こよなく、ねびまさり給へりけるなどを見るに、「心からよそ人にしなして、かく、安からず物を思ふ事」と、くやしきにも(⑤六七)

とあつて、ひたすら自業自得の後悔を重ねている。

浮舟巻では、薫について「いと本意なしなどおぼししづむるも、例ののどけさ過ぎたる心からなるべし」(⑤一九一)という箇所もあるが、これは、薫が浮舟を迎え取りたいと思いつつ、浮舟の義姉であつて匂宮の妻となつた中君が、薫は大君のことを忘れたのかと思うのではないか、それははなはだ本意なことだ、などと考へて浮舟への気持を押さえるのは、例によって、悠長すぎる性分によるのだろうという流れだ。ここでの「心から」は、直前の修飾句がかかっているうえ、その少し前で「かの人は、たとしえなくのどかに思しおきて」と述べられていることから見て

も、「心柄」の意だろう。

手習巻では、薫以外の男性が「心から」の語を用いている。尼君の亡き娘の婚であつて、現在は藤中納言の娘と結婚している中将が浮舟を見て心を動かし、妻を亡くしてふさがちである自分には、同様に悩みをかかえた女性、具体的には浮舟などがふさわしいと尼君に告げる場面だ。

世に心地よげなる人の上は、かく屈じたる人の心からにや、ふさはしからずなん。(⑤三四九)

つまり、この世で心地よさそうに暮らしている人は、私のように心がふさいでいる人間には似合わないと言へ、現在の妻との関係が円満でないことを匂わせ、物思いに沈んでいる浮舟となら相性が良いことを強調するのだ。「屈じたる人の心からにや」は、「我が心からにや」とあるべきところを、どんな「我」なのか説明したものと見るべきだろう。現在の妻としつくり行かないのは、沈みがちな自分のせいであることを「心から」の語によって示し、尼君の娘の死を悼み続けていること、また浮舟との関係を熱望していることを、この語によって示したのだ。「心から」「心づから」の語を用いて人間の心を追求してきた『源氏物語』は、その最後の例となるこの箇所において、この語を浮舟との結婚を熱望する男に都合の良い形で使わせ、浮舟に男女関係を柱とするこの「世」を拒否する気持を強めさせたのだ。

おわりに―成立論との関わり

『源氏物語』における「心から」「心づから」の用例を見て来て気づくのは、特定の巻にかたよって出現していることだ。分かりやすいように、以下に一覧表を示す。

部	用語	帖	巻名	系統	話者	誰の心か	内容
1	心から	6	末摘花	玉鬘系	源氏	源氏	末摘花等との関係
1	心から	10	賢木	紫上系	朧月夜	朧月夜	源氏との関係の継続
1	心づから	11	花散里	紫上系	語り手	源氏	藤壺・朧月夜等との関係
1	心から	12	須磨	紫上系	女房	空行く雁	常世を捨てて旅に向かう
1	心づから	13	明石	紫上系	源氏	源氏	明石上・藤壺・朧月夜等との関係
1	心から	19	薄雲	紫上系	源氏	源氏	藤壺・朧月夜等との関係
1	心づから	20	朝顔	紫上系	源氏	源氏	朝顔宮への思い
1	心から	21	少女	紫上系	秋好中宮	紫上	(春の町に住んでいるため?)
1	心づから	28	野分	玉鬘系	内大臣	雲居雁	夕霧を思って
1	心から	31	真木柱	玉鬘系	源氏	好色な男性	好色な人は一般に
1	心づから	32	梅枝	紫上系	夕霧	夕霧	自分から雲居雁と遠ざかっている
1	心から	33	藤裏葉	紫上系	語り手	夕霧	自分から女性を遠ざけてきた
2	心づから	34	若菜上	(玉)	朱雀院	女性一般	女三宮に対する訓誡
2	心から	34	若菜上	(玉)	朱雀院	女性一般	女三宮に対する訓誡
2	心から	34	若菜下	(玉)	語り手	柏木	女三宮への思い込み
2	心づから	35	柏木	(玉)	語り手	柏木	女三宮との関係
2	心づから	39	夕霧	(後)	夕霧	落葉宮	夕霧を受け入れようとしないこと
2	心から	39	夕霧	(後)	夕霧	夕霧	落葉宮への恋心
3	心から	47	総角	宇治	語り手	薫	女性が怖くて近づけない
3	心から	47	総角	宇治	語り手	薫	匂宮を手引きしたこと
3	心から	47	総角	宇治	語り手	薫	匂宮を手引きしたこと
3	心から	48	早蕨	宇治	語り手	薫	匂宮を手引きしたこと
3	心から	49	宿木	宇治	語り手	薫	匂宮を手引きしたこと
3	心から	51	浮舟	宇治	語り手	薫	(心柄?)
3	心から	53	手習	宇治	中将	中将	ふさがちな心のため

最上段の1は、桐壺巻から藤裏葉巻まで第一部、次の2は若菜巻上か幻巻までの第二部、3は匂宮巻から最後の夢浮橋巻までの第三部を示す。次の段は五十四帖の番号、次の段は巻名。その次の段は紫上系と玉鬘系の区別。この区別については、武田宗俊が提唱した当初は第一部だけが論じられたが、後に第二部でも若菜上下巻と柏木巻だけに玉鬘系の人物が登場することが指摘され、さらに後からの描き足しの可能性も示唆されているため、若菜巻上下と柏木巻は（玉）と表記した。また、第3部でも紅梅巻と竹河巻には玉鬘系の人物が登場するが、「心から」の語が見えるのは宇治十帖だけであるため、「宇治」と表記した。次の段の「話者」は、誰の言葉であるかを示す。直接の台詞と、その人物が詠んだ歌の場合は、その人物の名を記し、それ以外は「語り手」と記した。次の段には「心から」と言われているのは「誰の心か」を記した。

一見して明らかのように、「心から」「心づから」の語が登場すると、直後の巻や近接する巻でも続けて用いられる傾向が見られるが、紫上系に比べ玉鬘系が異様に少ない。第一部のうち、紫上系は十七帖、玉鬘系は十六帖であつてほぼ同数であり、分量も玉鬘系は紫上系の三分の二ほどであるのに、十二例のうち、玉鬘系は三例しかないのだ。しかも、藤壺への苦しい思慕が描かれる若紫巻などで用いられてもおかしくはないはずでありながら、「心から」の語が初めて登場するのは、物語がかなり進んでおり、しかも滑稽な第六帖の末摘花巻になってからであるうえ、源氏が「心から」の語を用いているこの巻は玉鬘系だ。また、紫上系で「心から」の語が用いられる最初は賢木巻だが、ここでは源氏ではなく、朧月夜が「心から」の悲しみを述べる歌を詠んでいる。

さらに第二部では、玉鬘系の人物が登場する若菜上下巻と柏木巻、そして後記説もある夕霧巻だけに「心から」「心づから」の語が見えているのが気にかかる。そして、第三部では、冒頭の三帖には用いられず、宇治十帖にだけ見えている。しかも、最後の中将の例を除けば、薫について語り手が「心から」の苦しさ、それも中君を匂宮に譲っ

てしまった後悔を語る例ばかりであって、「心づから」の語は使われず、「心から」のみが用いられている。

こうした状況の中には、成立論を考慮しないと説明がつかないものもあるのではなからうか。『源氏物語』の成立論論義は、盛んであった一時期に比べて下火になっているが、見直すべきだとする提唱もなされている¹⁴。最新の論文である諸井彩子「『源氏物語』第一部の衣装描写と人物造型試論…玉鬘系後記説を視野に入れて」（『千葉大学人文研究』第五二号、二〇一三年）は、『源氏物語』の衣装の描写、さらには衣装と登場人物の人間性を結びつけた記述の有無が、紫上系・玉鬘系の区別と連動していることに注意している。『源氏物語』は仏教に基づきつつ「心」を追求した作品である以上、その「心」に対する考察の特徴や洞察の深まりの過程を明らかにするには、仏教の影響と成立論に注意して検討してゆく必要があるだろう。

注

- (1) 石井公成「『万葉集』の恋歌と仏教」（駒澤大学仏教文学研究）第七号、二〇〇四年。
- (2) 古本系は「己之行柄」だが、仙覚本系は「行」を「心」に作る。「剣大刀」は枕言葉としては「名（な）」にかかる例が複数あるため、諸注釈ではこの部分を「な（汝）」が「こころ」と訓むのが通例だ。「己之行柄」という漢字表記自体は、自業自得を思わせるものとなっている。
- (3) 石井公成「『万葉集』の恋歌と仏教」（駒澤大学仏教文学研究）第七号、二〇〇四年。
- (4) 同「言葉遊びと仏教の関係―『古今和歌集』物名を手がかりとして」（駒澤大学佛教学部論集）第四四号、二〇一三年。
- (5) 同「見仏から恋歌へ―『古今和歌集』の仏教的背景―」（駒澤大学仏教文学研究）第六号、二〇〇三年。
- (6) ISHII Kosei, Traductions sinisées de textes canoniques indiens et japonisations de termes chinois de traduction, Des

- (7) 日本古典文学大系本（岩波書店）の総角巻では、薫が大君に思いを訴えると、大君は「心からに、憂く聞き給ふ」（四一七頁）とあるが、補註によれば古本によって補入したもののようであって諸本にはないと説明されており、新大系本ではこの部分は省かれている。文脈から見ても無方が自然であるうえ、旧大系本の注が「心から」を「心の底から」と注記しているのは不適切。
- (8) 『源氏物語』からの引用は、新日本古典文学大系（岩波書店）により、その冊数と頁で示す。新編日本古典文学全集（小学館）、新潮日本古典集成（新潮社）についても同様の形で表記し、新日本古典文学大系は「新大系」、新編日本古典文学全集は「新編全集」、新潮日本古典集成は「古典集成」と略記する。
- (9) 石井公成「心を探る文学―『源氏物語』の唯心思想」（『文学』第四卷第四号、二〇〇三年）。『源氏物語』では、他にも「心の闇」「心の鬼」など仏教由来の表現がキーワードとして重要な役割を果たしている。
- (10) 武田宗俊『源氏物語の研究』「第一編 源氏物語の成立過程に就いて」（岩波書店、一九五四年）。
- (11) 石井、注1論文。
- (12) 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『源氏物語（七）』（岩波書店、二〇二〇年）五六一頁。
- (13) 加藤昌嘉・中川照将「『源氏物語』はどのように出来たのか？」を考えるために」（今西祐一郎・室伏信助監修、加藤昌嘉・中川照将編『テーマで読む源氏物語論 第4巻 紫上系と玉鬘系―成立論のゆくえ』、勉誠出版、二〇一〇年）。
- (14) 加藤・中川、注12前掲書。加藤「源氏物語」前後左右「『源氏物語』はどのように出来たのか？」を再考する」（勉誠出版、二〇一四年）など。